

西鶴と芭蕉

「不破の関」をめぐって

横山邦治

(一)

現在の東海道本線関が原駅から国道を西すると、新国道から左側に入る旧国道があり、数米にして、不破の関の旧跡がある。今少し西して左すると、下り勾配のだから坂あって、杉並木のため、まゝを見せた中山道の旧街道らしきが続いている。不破の関、旧跡、道路に面して西側に病院あり、東側に凝った構えの民家あり、その民家の庭先に、不破の関、旧跡址がある。民家の主たる老爺、溜溜とその関跡の碑面の文言を弁じて憊むことを知らない。

その民家の庭先には、当然とはいえ、不破の関に由来する歌碑・句碑が多く建つ。その一つに、芭蕉翁の句、

秋風や藪も鳥も不破の関

も、つましやかに並んでいる。老爺は、その句意について、不破の関旧跡は、周囲の広大な藪や鳥も包括しており、昔日の不破の関の隆昌さがしのばれると感嘆しながら秋風に芭蕉様は吹かれていらしやる、という独特の解を弁じてくれる。(ただしこれは耳に残った文句を組み立てたもので、正確に記録したものではない。私の耳が曲解しているかも知れない。)その確固たる口調に、現代の関守をもって任ずる老爺の誇りと自信を感得するのである。

(二)

野ざらしを心に風のしむ身かな
の句を巻頭にする「甲子吟行」に

大和より山城を経て、近江路に入て美濃にいたるに、います・山中を過て、いにしへ常盤の塚あり。伊勢の守武がいひける「よしとも殿に似たる秋風」とは、いつれの處かにたりけん。我もまた、

義朝の心に似たりあきの風

とあるに続いて載る不破の関の句意は、例せば岩波の古典大系45の頭注(大谷篤蔵氏)に(発句篇)、

「入すまぬ不破の関屋の板びさしあれにしのはたゞ秋の風

藤原良経」(新古今集十七)の歌による。一略一眼の前の藪にもこの鳥にも、秋の風が吹きすすさんでいる。ここは昔の不破の関所の跡なのだの意。関屋もなく藪や鳥ばかりとなった関跡の荒涼と、秋風の悲愁感。

とあるごときもの、さらに詳細なる解の一つとして挙例すれば、「芭蕉―その鑑賞と批評―」山本健吉著に見える、

九月の始め、芭蕉は郷里伊賀へ帰り、また大和を行脚し、山城・近江を経て、美濃に入った。この句は「不破」と前書があ

る。不破の關址に立ったときの句であり、秋も末の季節である。

不破の關址は、今不破郡關ヶ原町大字松尾にある。この關は壬申の乱の要塞で、養老七年（七二一）に關所をつくられ、伊勢の鈴鹿、越前の愛發（あるいは近江の逢坂）とともに三關の一とされたが、平安末にはすでに廃されている。その他足柄・勿來・白河・須磨などの關とともに、平安時代には歌枕とされていたが、不破はその荒廢のさまを詠むのが定めとなっていた観がある。例えば「和歌所の歌合に關路秋風といふことを、入すまぬ不破の關屋の板庇荒れにしのちはただ秋の風」（藤原良経、新古今集）の如きであり、芭蕉の句もこの歌に導かれているのである。

今はその址は、一民家の庭になっていて、記念碑が建てられてあり、藪も島もあると、野田別天楼は言っている。關ヶ原附近は、冬の來ることが早いから、九月も末に關址に立った芭蕉は、不破山を吹きおろす秋風がひとしお身にしみたであろう。遠い伊吹山はすでに雪をかぶり、近くの山々は鮮かに紅葉して、田には稲塚が並んでいる、その關址に立って、芭蕉は懐古の情にひたる。「藪も島も」というのが、良経の和歌の抒情から脱化して、詠歌に現實感を與え、俳諧化を完了している。良経が詠んだ荒れた關屋も影を止めず、秋風が蕭條と吹きすさぶ藪や島が、今は不破の關址なのである。その土を現に今、自分の足で踏まえたのだという實感に、この句は溢れている。後に高館で、芭蕉は「夏草や兵どもが夢の跡」の句を詠んだが、同じ傾向の句の發展である。子規は雄壯なる句の一例としてこの不破の句を挙げ、「高館の句は豪壯を以て勝り此句は悲慘を以て勝

る」と言っている。

のごときである。要は、中世以降、不破關たる名称に反して破れ果てて板庇から月の光が洩るといふイメージの歌枕として定着した不破の関（藤原良経の歌以外にも、○板間より月の洩るをも見つるかな宿は荒らして住むべかりけり、詞花雜上○秋風に不破の関屋のあれまくも惜しからぬまで月ぞもりくる、新後撰秋上○略一番馬、醒井、柏原、不破の関屋は荒果て、猶モル物ハ秋ノ雨ノ、イツカ我身ノ尾張ナル略一太平記卷二○不破の関の板間に、月の洩るこそやさしけれ、松の葉卷一 など、枚挙にいとまない程である。）に立った芭蕉が、そのイメージをくすさないままに俳諧の附合の語として定着していた藪と島（毛吹草・俳諧類船集など俳諧の附合語彙を集めたものに全て著録されている。）という俳諧語彙を導入して俳諧化した句であった。

芭蕉が、中世以降定着した不破の関のイメージをくすまいといっているのは、「甲子吟行」の冒頭に、

千里に旅立て、路糧をつゝまず、三更月下無何人といひけむ、
むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をい
づる程、風の聲そゞろ寒げなり。

と、古人の心を我が心とせんとする姿勢、さらには後醍醐帝の御陵を拜して

御廟年を経てしのおは何をしのお草

としのお草に託して懐古の情を吟じ、既出不破の関の句の前の句では、荒木田守武の付句に唱和して義朝の心の寂寥を偲ぶ、そうした芭蕉の心情の在り様から十二分に察しられるのである。少くも「甲子吟行」の旅における貞享元年という時点での芭蕉の心は、古人の

眼を通して目前の不破の関を見ようとしていたといえるであろう。

(三)

元禄五年初春の刊記を有している西鶴の町人もの「世間胸算用」

巻五の一、つまり夜の夜市に、

世になきものは銀といふは、よき所を見ぬゆへなり。世にあるものは銀なり。其子細は、諸国ともに三十年此かた、世界のはんじょう目に見えてしれたり。昔わら葺の所は板びさしと成、月もるといへば不破の関屋も、今はかはら葺にしら土の軒も見え、内ぐら・庭蔵、大座敷のふすまにも、砂粉はひかりを嫌ひ、泥引にして墨絵の物ずき、都にかはる所なし。

と、不破の関跡の現状を述べる。藁葺の屋根が板庇に進化している世情を説いて、板庇から、月もる、不破の関屋、と歌枕の伝統に添って連想し、そして西鶴の目は現実の不破の関を活写する。岩波の古典大系の頭注(野間光辰氏)には、

不破の関趾附近はもと大関村といひ、木曾街道に沿う。このあたりの農家の富裕のさまは、延宝七年頃西鶴が大垣へ旅行した時の実見にもとづくものであろう。

という。延宝七年実見説を可とすれば、芭蕉が不破の関趾に立つよりわずか五年以前のこととなり、まずは西鶴の見たそれと芭蕉の見たそれとはほぼ同一のものとしてよかつた。

ところで果して旧大関村の農家の様が西鶴が説くごとく富裕であったかどうか、ここに実証する術を知らないが、現在においても、草津から旧東海道と旧中山道に分岐していく道をそれぞれたどっていくと、両街道筋の貧富の差がますますと実見される思いがある。

東海道に向えば、和中散本舗の豪華な本陣跡が見られ、伊勢参りの垢落して賑った関の宿場跡、関の地蔵・石薬師など昔日の股賑の面影を残しているけれども、鈴鹿越えに至る道筋、鈴鹿を越えて関から亀山に至る道筋の人家のたたずまいは、昔日の富裕の様を反映したものは見受けられないようである。道中の宿場宿場が、東海道利用者で繁昌していたのみともいえそうである。それに反して、中山道に向うと、近江路・美濃路ともども目ぼしい宿場の遺構もないかわりに、近江盆地の豊かな穀倉地帯を背景に、街道に点在する家々のたたずまいが農家の豊かさを反映しているごとくに思われる。不破の関は、滋賀と岐阜との県境に近く伊吹山を背景にして農村というより農山村というに近いであろうが、近江路の富裕さの余映を充分に残しているたたずまいを家々は見せていた。

とはいえ当代に見られる現象をもって直接近世時における事柄を云々にすることは不可である、しかし近世時において、少くも西鶴・芭蕉が生きた元禄の盛時まで頃は、草津より宮(現在の名古屋)に至る街道は、中世以来の関東に至る主街道であった近江路・美濃路を経る中山道の方が、鈴鹿越えの東海道より街道そのものとしても栄えていた。少くもその余映があったとしてよかつたろう。「甲子吟行」の途次、不破の関を過ぎた芭蕉は、中山道の本街道を大垣で分れて熱田へ参詣、そして名古屋に至る。そこで芭蕉は、

名古屋に入ル道の程飄吟ス

狂句風の身は竹齋に似たるかな

と、風狂の我身を竹齋に擬して吟じた。芭蕉の興じたその詩精神については今は問わず、仮名草子「竹齋」に描かれた竹齋と覗之助主従も、今宵宿借る草津の宿、から近江路を通過して、誰かは止めし

関が原、不破の関屋の板庇、戸板も壁も崩れ果て、と不破の関を経て大垣を通り名古屋に入っている。甲子吟行の芭蕉の通った街道と一致しているというだけでなく、竹齋が名古屋に至るに東海道を經ずして中山道を選んだことに、江戸初期の東下りの在り様がかうかえて興あることなのである。モデルが「竹齋」の作者富山道治と一族であるとされる「日本永代蔵」巻二、才覚を笠に着る大黒、の大黒屋新六も、東下りに、

草津の人宿にて年を取、姥が餅をむかしの鏡山に見なし、頓て心の花も咲出る桜山、色も香も有若ざかり、かせぐに迫着貧乏神は足よはき、老曾の森の注連鋸もおのづからに春めきて、秋見る月もたのもしく、不破の関戸の明暮、美濃路・尾張を過て、という具合に中山道を経て宮に出ている。道行文的叙述であるから、「太平記」の東下りの道行文のパターンを模して中山道を旅せしめたとの強弁も成り立つであらうが、ともあれ中山道を通らせた事実も否定できない。この大黒屋新六は、家を追い出されて一文なしの旅を、小野の里で手に入れた、特牛程なる黒犬、を丸焼にし、狼の黒焼は、と、つき付商ひ、をして旅費を檢出、江戸へ下るのである。追分から八丁までに、五百八十が物代なし、た新六は、草津の宿で年越をして中山道か東海道かと思案したに違いなかった。当然、つき付商ひ、に有利な道筋をいうのが、新六の思案のしどころであつたらう。道中急ぐ要もなかったから、中世以来開けた富裕な街道たる中山道を選んだのである。ここにも不破の関を含む中山道筋の在り様がかうかえるのであり、「世間胸算用」に見られた西鶴の不破の関の描写が、必ずしも絵空事ではないことを示しているといえた。

西鶴は「武道伝来記」巻一の三、嗟嗒といふ俄正月、で天正の比陸奥若松に五月のすゑ大あられふりて、板屋の軒端はあれて、東に不破の関屋見せける。

と、良経の歌をそのまま踏まえた文章も書いてある。しかしこの文章では、陸奥若松の板屋の軒があられて荒れて、古歌に見える不破の関屋のようになったとあるわけで、不破の関そのものを描写しているのではないことが明らかであるから、西鶴の不破の関を見る目の在り様を云云することはできない材料である。

かく見てくる時、不破の関を採りあげる連想の種こそ良経の、と
いうより

秋風に不破の関屋の荒れまくも惜しからぬまで月ぞ漏り来る
(新後撰四・藤原信実)

という古歌に得たであらうけれど、この古歌に示された中世以降の伝統的美意識に捉われることなく、眼前の実景を描写した西鶴の凝視力の確かさを再確認しなくてはならない。そしてこの描写を生む凝視力を支える町人—三十年此かたと古典大系の頭注にいうごとき経済的變動を的確に捉え得た力を含めて—としての精神力のしたたかさを、ここで再確認しなくてはならないであらう。

(四)

説き古されたことながら、西鶴の描写力、凝視力の強靱さ、的確さを示す例を一つ挙げてみよう。

「好色一代女」巻一の三、国主の艶妾、において、高望みの大名の側妾にと当世の美女の典型を、女絵、にして、それを仔細に西鶴は描写する。それは、

先年は十五より十八迄、當世貞はすこし丸く、色は薄花桜にし、面道具の四つふそくなく揃へて、目は細きを好まず、眉あつく、鼻の間せはしからず次第高に、口ちいさく、齒並あら／＼として白く、耳長みあって縁あさく、身をはなれて根迄見へすき、額はわざとならずじねんのはへどまり、首筋立のびてをくれなしの後髪、手の指はたよはく長みあって爪薄く、足は八もん三分に定め、親指反てうらすきて、胴間つねの人よりながく、腰しまりて肉置たくまじからず尻付ゆたやかに、物越衣装つきよく、姿に位そなはり心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて萬にくらからず、身に癩子ひとつもなきをのぞみ

というのである。精細で生き生きとした描写で当代の典型的美女像が具象的に描かれているのであるが、現代の目で見ると変哲のないくそリアリズム描写とうつるかも知れない。しかし次の例と比較すると、その卓抜な描写力、凝視力を認めざるを得ないであろう。その例とは、仮名草子のそれである。薄雪とか恨之介とかいう中世物語的な恋愛小説には必ず女主人の描写が見られるのであるが、ここでは手近な「恨之介」の例を挙げる。

その中にとりても、琴を調べておはします上臈の御姿を見てあれば、年らいならば、十五か六と見え給ふが、紅の千入の袴を踏みしだへ、肌には何をか召されけん、上には白き綾子に、色々の絲をもつて、物の上手が縫ふたりけり。御上前のくだりには、恋を駿河の富士の嶺を、浮雲が帯となり、解かんとすれば結びもなく、煙は空に横折れて、風に靡き、高嶺の消えやらで、裾野は茂る山なれば、紅葉踏み分け鳴く鹿の、妻問ふ聲にあはれ増す。さて御肩より後には、羽衣の松緑にて、齡は君が例か

や、さて又裾の蹴廻しには、浮島が原・田子の浦、海士の釣舟ほの見ゆる、磯打つ浪の激しくて、浪たたゞよふ濱千鳥、げにあり／＼と縫はれける。さて帯の結構には、五郡の綾に摺箔し、その間々に秋の野に草盡し縫ふたる。翡翠の髪さしは婀娜とたをやかにして、楊柳の風に靡くが如し。桂の眉は青ふして、青黛が立板に水を流すに異ならず。宛轉たりし雙蛾は、遠山の月に相同じ。また鶯舌の囀りは、露を含める絲菽の、かごとばかりに咲き初むる、花よりもなをいつくしや、袖打拂ふ雪の下、紅顔錦繡の粧、花鳥が絵に寫すとも、筆にはいかで及ぶべき。

当代人の筆力の限りを尽した描写と思われるけれども、如上のごとし。さすが美女描写として万全を期し得なかつたことを自覚した作者は、幸若舞曲やお伽草子の常套手段であつた美女名鑑ともいふべきを例挙する。物によく／＼譬ふれば、唐の楊貴妃……と始まって無慮五十四名の美女を挙げ、そして

をよそ源氏に見えけるは、桐壺・簪木・若菜、紅葉の賀・花の宴・葵の上、その神葉に花散里、須磨・明石・滯標、六十餘帖のものとても、これにはいかで勝るべき。

と終る。このように委曲を尽してその美しさを強調するけれども、結局具象的には何のイメージをも読者に与えはしないのである。西鶴の場合は、女絵の描写であり、「恨之介」の場合は深窓の貴婦人の描写であつたから、その間に何らかの相違があるは当然とも言えたであろうが、両者の描写力の差は無限としていいであろう。言ってみれば、中世的美意識の羈絆から脱し切れぬものと、近世人としての美意識を伝習に因われることなく自在に表現しうるものとの差である。

美女の様子を紹介するを主眼とした遊女評判記類とて、初期のものは

一略一くにといひて、かたちゆうに、心さまやさしき遊女候ひしか、柳髪風にたをやかに、桃顔つゆをふくめるふせい、舞曲花めきて、もゝのこびをなせり、音声雲にひゞき、ことは玉をつらね、春風あたゝかにして、聞人までも、おぼえずせんだんの林に入かとあやまる、云云(寛永十八年刊そゝろ物語)

八千代 尤傾国なり。全盛ならびなし。嬋娟両鬢。秋蟬翼。宛転双娥。遠山色。云云(明暦元年刊嶋原集)

など、紋切形の中世的表現法による描写が見られるが、同じ「嶋原集」の、八千代、の項の中に続いて

一略一さりながら。すこし顔少きか。また様子そりかへり。体八千代めかず。はし傾城の風あり。云云

とか

三笠 様子よし。左門がながれなり。ひたいせばく。色わろし。付たり、齒なみわろし云云

と、具象的描写の萌芽も見られないでもない。やがては、

よし田かふるさん 角町 玄丹内 顔うすかわにして、なるほどしろく、目もとしほら敷、うつくし、ちと、かいだれたるともいわんか、あまり、目もとうつくし、ちと、うれいがましくみゆるが、

難なるべし、口ちいさく、これもうつくし云云(吉原よぶこ鳥)

といった可成に具象的描写が見られるに至るけれど、同書の中でも

一歩進めば

ときはかふりこりん 同町 仁左衛門内

此君は、色しろく、生れ、すなほにて、まことに、太夫ともいふべしや、御心ざし、あてやかにして、いつわりの世とだに、しらせたまはぬ御心ざし、艶閉て、ほのかに見たてまつれば、ちゞの御すがた、人のこゝろをくらまして、たちまちに、雲間に月をうしなふかと、あやまたれ、優閉て、あらはにをがみ奉れば、百のこび、人のなさけをうきたて、すなはち、翠霞の花にあへるがごとし

という描写に転ずる。前世代の描写法の尾軀骨を除去し得ないというええようか、具象的描写法とて、西鶴のそれと比べると、その効果の格段の差に驚くのである。極めて即物的であるべき遊女評判記にして然り、他の凡百の仮名草子に果していかほど西鶴に匹敵する描写をなし得ているであらうか。

ところで芭蕉においても、彼の紀行文・俳文における自己表出の確さ、自然描写の把握の正確さ、行文の流麗さについてはすでに多くの論がある。それについて云云するのは、私の任でもない、ましてここで女性の美についての描写力を云云するのは、偽書かとはいえず「行脚の掟」に

女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道に親炙せば、人を以て伝ふべし。惣じて男女の道は嗣を立てるのみなり。流蕩すれば心懸一ならず。此道は主一無適にして成就す。己を省るべし。

と説いたとも観られている芭蕉にとって迷惑この上ないことであらう。ましてや浮世草子の好色ものを創始して、女性専科とも見られる西鶴のそれと比較されるのは、心外でもあらう。事実、女性の美について描写した文章は極めて少いようである。

一家に遊女もねたり萩と月

の句を詠んで、「奥の細道」の恋の座ともされて有名な市振の宿の部分でも、白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさまじう下りて、定めなき契、日々の業因、いかにつたなし」と語る遊女の身の上をも思い、哀さしばらくやまざりけらし」との感懐を抱くのである。芭蕉の興趣の在り様の方向もうかがえようというもの、まして一家の句意が山本健吉氏説（「芭蕉―その鑑賞と批評―」）のごとく西行と江口の遊女との故事に思い寄せているものとするれば、一層に芭蕉の方向感覚が明瞭となってくる。

那須の黒羽へ途次、芭蕉は野飼の馬を借りる。ちいさき者ふたり、馬の跡をしたひてはしる。獨は小姫にて名をかさねと云ふ。詩的繪画的興趣あふれた好点景であるが、そこで芭蕉は

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良

の句を「奥の細道」に摘録する。芭蕉自身の句ではないとはいえ、この情景の描写には可としての摘録であるに違いなかった。かさねから連想したものが、八重撫子と極めて古典的背景を有するそれであり、そうした連想の在り様を可とした芭蕉の感懐は、不破の関での句を成した感懐と重なりあうものとしていいであろう。

古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。として奥の細道の旅に出た芭蕉の在り様と、談林の町人的自由奔放な発想法を体得しながら伝統に捉われない観察眼をみがいいた西鶴の在り様とは、可否は別としても、明瞭な相違を示しているといえよう。その一つの好箇の例として、両者の不破の関観が浮び上ってくと断じて、左程間違っているとはいえないであろう。

そして実地に現在の、不破の関、跡を踏破し周辺の風物を見聞するとき、西鶴の捉われざる描写力の確かさを改めて再確認するのである。

* * *

昭和四十六年の八月盛夏、夏休暇を利用して学生数名と京から江戸へ東海道五十三次を尋ね、昭和四十七年八月下旬、同じく学生数名と京から江戸へ中山道を経て下ってみた。近世に栄えて、今や廃道と化しつつあるこれらの街道を歩いてみて、近世文学研究の一端をかじっている者として深い感懐を抱かずにはおられないのであるが、今はそれをまとめておく余裕がない。ここでは、たまたま不破の関趾での老翁の流暢な講釈から連想した思念をまとめてみただけである。

(本学教授)